

# 鶴町幼稚園での実践から見た南信子の 幼児教育観及び子ども観

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻  
熊田 凡子

## 要旨

本稿では、南信子の鶴町幼稚園における幼児教育の実践を、一次史料『第拾七回修了記念アルバム 鶴町幼稚園』に描かれた生活や遊びの内容から明らかにする。

南信子は、1942（昭和17）年度の鶴町幼稚園における遊びや生活の中で、子どもの内側から湧き出てくる1人1人の思いや考えを受け止め、子どもが自由に表現する想像／創造的な活動を展開していたことを記念帖に綴っていた。また、戦時下における鶴町幼稚園では、国家主義による影響や基督教保育連盟の指示に応じる中でも、キリスト教の行事の記録は残っていた。しかし同時に、幼稚園における子どもの活動は、戦時社会をそのまま映し出していることも示していた。

南信子の戦時中のキリスト教幼稚園での幼児教育の実践では、子どもの主体的に動き出す自由作業や経験に結びつく対話、さらにリズムやごっこ遊び・劇等を通じた、想像／創造的な楽しい経験が繰り返し広がっていた。それは、たとえ戦時体制の状況であっても、子ども1人1人の内側が動き出す素直な心を尊重し、なかでも子どもと祈る神への祈りを重視したものであった。それが南の自由な教育であった。

## キーワード

戦時下の幼児教育・キリスト教幼稚園・自由教育・お祈り

## Minami Nobuko's View of Early Childhood Education and Children Analyzed through the Practices at the Tsurumachi Kindergarten

Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

KUMATA Namiko

## Abstract

In this paper, I clarify Minami Nobuko's practice at Tsurumachi Kindergarten through the activities, lives, and plays recorded in the primary historical material The Album to Commemorate the Completion of its Seventeenth Year (1942).

Minami Nobuko notes that she deeply understood the wishes and the deep thoughts of each child, and that they expressed their imaginative and creative ideas freely in their play. It also recorded some Christian events under the influence of the wartime nationalistic regime, and the instruction of the "National Christian Educational Association." At the same time, however, the materials showed that the children's activities at the kindergarten were reflective of wartime society.

Minami Nobuko's practice of education showed that there were various kinds of fun activities carried out at the Christian Kindergarten during the wartime period, such as creating original art of the children's free will, rhythm, make-believe games, drama, and conversations leading to other activities. Even in a wartime period, she respected the honest mind of each child and cherished prayer to God with children. That was what Minami's liberal education was about.

### Keyword

Childhood Education during the Wartime Period, Christian Kindergarten, Liberty Education, the Prayer

## 1. はじめに

本稿は、1942（昭和17）年度の鶴町幼稚園の記念帖に描かれた南信子の実践から、戦時下におけるキリスト教幼児教育（保育）の一端を、明らかにすることを目的とする。

南信子は、北陸学院保育短期大学の創設（1950年）に関わり、戦後のキリスト教幼児教育を指導した人物である<sup>1)</sup>。これまで筆者は、戦前戦後の南信子の実践と保育思想形成過程について探究してきた<sup>2)</sup>。南は、1937（昭和12）年4月から1940（昭和15）年3月までランバス女学院（後の聖和女子学院（現在：関西学院聖和短期大学）の前身校）で幼児教育を学び、岩国幼稚園（山口県）で2年間主任保母を経験した。その後、1942（昭和17）年4月より、日本メソジスト大阪鶴町教会にあった鶴町幼稚園で1年間主任保母を担っている。さらに、1943（昭和18）年から1949（昭和24）年まで、聖和女子学院附属聖和幼稚園（現・関西学院幼稚園）で幼児教育を営んだ。

鶴町幼稚園とは、かつて1930年代に「ランバス関係幼稚園」と呼ばれていたランバス女学院の実習園の1つで、南が学んでいた時代は「鶴橋学園鶴町幼稚園」と称していた<sup>3)</sup>。本稿では、南信子が携わった鶴町幼稚園の記念帖から、当時の子どもの様子や教育内容及び行事等を明らかにし、そこから読み取れる南信子の幼児教育観及び子ども観を考察してみたい。

## 2. 史料と先行研究について

本稿で取り上げる史料は、『第拾七回修了記念アルバム 鶴町幼稚園』<sup>4)</sup>（以下「記念帖」と示す）である。これは、当時の保母であった南信子と甲斐道子のいずれかが、遊びや生活場面及び行事に関する写真を貼り付け、その様子を記述したものである。

筆者のこれまでの調査によれば、「記念帖」は北陸学院ウイン館所蔵のもの1冊しか実存しない貴重な史料である。また、「記念帖」には、保母の言葉や子どもの思いが具体的に描き出されており、当時の教育実践を読み取ることができる。筆跡から「記念帖」の記事の記述者は南信子であると考えてよい。この「記念帖」の内容は、『聖和保育史』<sup>5)</sup>等ではわからない戦時下の実態を鮮明に示しているものである。

戦時下のキリスト教幼児教育の実態は先行研究において十分に明らかにされてこなかった。戦時下における幼児教育の実態については、『日本幼児保育史』<sup>6)</sup>、『日本キリスト教保育百年史』<sup>7)</sup>、『幼稚園教育百年史』<sup>8)</sup>等の文献では、保育制度や保育案の動向について具体的な記述がみられるものの、保育日誌には詳細な情景は描かれておらず、「遊んでいる」「歌う」というような記述にとどまっている。キリスト教幼児教育の言及についても同様である。中村早苗による「戦時下におけるキリスト教保育の変容—東洋英和幼稚園の保育日誌を中心に—」<sup>9)</sup>には、戦時体制下のキリスト教幼児教育の全体像や、当時の保母らの思いをのせ

た日誌の記述内容があるものの、子どもの様子は詳細に表されていない。

そこで、筆者は「戦時下の聖和幼稚園におけるキリスト教幼児教育の実態」において、戦時下のキリスト教幼稚園における幼児教育の一実践として、1943（昭和18）年度の聖和幼稚園の実態が分かる一次史料群を分析し、南信子とその恩師立花富が戦時下でなし得た足跡を明らかにした<sup>10)</sup>。南信子と立花富は、戦時体制に対応せざるを得ないなかで、キリスト教幼稚園での生活における1人1人の子どものエピソードを詳細に残しており、子どもの内面や保姆らの子どもを見る目を大事にしていた。

「記念帖」は、南の一貫した子ども観及び教育観を読み取れる貴重な史料でもある。南信子の聖和幼稚園時代の前年度、すなわち1942（昭和17）年度の鶴町幼稚園での実践がいかに展開されていたのか。また、それは、戦争という社会背景によってどのような限界があったのか。本稿では、「記念帖」に記録された実情を探り、そこに込められた当時の保姆南信子の思いに迫りたい。

### 3. 幼児教育界における国家体制の実態<sup>11)</sup>

1941（昭和16）年12月に太平洋戦争が起こり、戦時色を反映して、多くの日本の幼稚園では、一斉保育、合同保育、集団訓練、動的で敏速な遊びや生活が重視され、幼児の自発性よりも保姆の主導性に基づく教育がなされるようになった。

また、国民学校の新制度（1941年）の影響で、教育界には戦時国家による要請が強く反映された。

たとえば、国家意識の高揚につながる行事として、「(1) 神社参拝 (2) 国旗掲揚 (3) 皇居遙拝 (4) 時局の話など」が挙げられていた。また社会の実態に応ずる行事として、「(1) 出征将士に対する感謝の意をあらわす (2) 出征将士の見送り (3) 慰問袋を作る (4) 旗行列をするなど」が推進されていた。さらに、幼稚園の教育内容は「(1) 体力をつける (2) 手技慰問袋を作る (3) 唱歌 (4) 談話 (5) 観察 (6) 栄養食の指導と日の丸

弁当の実施」など戦時的な影響を受けていた<sup>12)</sup>。具体的には、寒さに負けない幼児をつくるための活動を多くし、遠足会・国民体操をすること、慰問袋や看護帽などを作ること、戦争に関連した歌・軍歌を歌うこと、時局に関する話や戦争の美しい場面の話を聞いたり、新聞の切抜・写真などが用いられ、日の丸弁当を奨励したところもあった。

ところが、必ずしもすべての幼稚園が上記の事項を実行していたわけではない。幼稚園の方針で、ことさら積極的に戦時色を入れようとしなかったところもある。幼児教育界ではそれが可能であった<sup>13)</sup>。

たとえば、教育目的には「健全なる身体」「純真、敬虔ナル性情」「躰ノ重視」「皇国民ノ錬成」を加え、また保育方針では「皇国ノ道ノ修練」「国体ニ対スル信念ノ根基ノ培養」「国民的情操ノ素地ヲ培フ」「科学的興味ヲ養フ」「園外保育ノ重視」が強調されつつも、保育方法では「保育ハ幼児ノ自由生活ヲ中心トシ観察、談話、手技、唱歌、遊戯等ヲ内容トシ之等ヲ統合セル遊ビトシテ行ナフ」<sup>14)</sup>と示されている。幼児教育では、表面上は国家主義的であっても、実際の中身やあり方においては幼児の自由な生活を保つことができたのである。それは、幼稚園という制度が教育体系の中で比較的曖昧な位置づけであって、権力の支配下から除外されがちだったからである。

他方、キリスト教幼稚園では、基督教保育連盟（現：キリスト教保育連盟）<sup>15)</sup>が、各加盟園に行政官庁の意向に添った「礼拝」について（「昭和17年3月7日付通達」<sup>16)</sup>）を送付していた。同通達は、小学校が国民学校と改められ、新体制の確立とともに皇国民としての基礎的錬成を行なうことになったので、「我が幼稚園に於てもこの方針に積極的に協力して行かなければならない事を痛感」したとする立場を明確にしている。

通達では、礼拝とは「幼稚園は本来教育機関である事を認識して一宗一派の布教に偏せざる様注意して宗教的情操の涵養を目的として禮拝を行ふ事」であると主張されていた。また、祈り方は

「祈りの始めに“神様 天のお父様”の呼びかけ、終りは“聖名によって祈り奉る”或は“この祈りをどうぞ神様がお聞き下さいます様に”と結び一宗一派を現はす言葉を用ひぬ様に努めること」と説いていた。さらに、祈りの内容は、「大詔の聖旨に則って祈ることは勿論、日常生活に於ける感謝・祝福・懺悔・祈願等を爲し、大いに國家目的完遂を望むこと」としていた。讚美歌は「情操教育の爲に用ふることとし、特に基督教の聖歌として用ひらるべきものは、日曜學校に於て使用する事」、聖話は「心の糧として大いに用ふることを必要とするも、傳道布教的態度を以て話さざる事」、聖画は「名畫として又は芸術的價值あるものとして教材又は鑑賞用とに用ひ、之に偏せざる様、他に聖畫以外の繪畫寫眞等を使用する事」と定めていた。

たとえば、祈る場合、「エス様」を「神様」「天のお父様」のように呼びかけた。「主と共に」を「神様と一緒に」、「主にいのる」を「祈るなり」、「主のみなをば」を「神のみなを」、「エス様とともに」を「仲良くいっしょに」に置き換えさせられた。終わりは「聖名(みな)によって祈り奉る」あるいは「この祈りをどうぞ神さまがお聞き下さいます様に」と結び、終わりの「アーメン」を除いて、キリスト教を現わす言葉を用いないとした。保育連盟は、実際にキリスト教的表現を時局に適った用語に言い換えさせても、保姆自身の信仰と人格の中で、キリスト教的保育が保育技術としても実現可能だと、主張したのである。

このように、通達は、キリスト教色をあらわさない国家戦時体制に忠実に従うためのものであった<sup>17)</sup>。幼児教育界には、戦時体制の要請はなかったにもかかわらず、基督教保育連盟はあえてこれを通達し、国家への協力姿勢を示した<sup>18)</sup>。それは、キリスト教幼児教育を続けていく上で、受け入れざるをえないという当時の基督教保育連盟の判断によるものだった<sup>19)</sup>。

このような幼児教育界の実情にあっても、1942(昭和17)年度の鶴町幼稚園では、南信子らによって自由な幼児教育が展開されていた。次章では、

「記念帖」の中身より具体的にとらえていくこととしたい。

## 4. 考察

### 4-1. 昭和17年度鶴町幼稚園記念帖の内容と構成

表1は、「記念帖」における遊びや生活場面を項目一覧(全23頁内18項目構成)で示したものである。表紙以降は各項目順に数字で示し、項目タイトルは、各頁の冒頭に記されている事項を原文のまま記載した。各項目はほぼ1頁で構成されており、2頁使用のものは別記した。

表1：鶴町幼稚園第拾七回修了記念アルバム一覧

表紙	第拾七回修了記念アルバム 鶴町幼稚園
1	皇紀二千六百二年 (園児募集写真)
2	オトモダチ ヨセガキ (2頁)
3	ラジオタイソウ (歌・エピソード・写真)
4	オイノリ (歌・写真)
5	ワタクシタチノオシゴト (エピソード・個人記録・写真) (2頁)
6	リズムノジカン (エピソード・写真)
7	オウタヤオハナシノジカン ゴソウダンノジカンノコト (エピソード)
8	ヒノテルトコロデ アソベアソベ オモシロクウタヒ アソベアソベ (エピソード・写真)
9	ママゴト キグミノオトモダチ (写真)
10	ダイトウアセンガ ハジマツテカラ (エピソード・写真) (2頁)
11	オベントウ (歌・写真)
12	ハナノヒ (歌・写真)
13	ナラノワカクサヤマニテ エンソク (エピソード・写真)
14	(クリスマスの歌・写真)
15	オヒナマツリ (歌・写真)
16	ソツギョウノトキ (エピソード・歌・写真)
17	ボクガ大キクナツタラ ワタシガ大キクナツタラ (1人1人の夢と名前)
18	第十七回修了児名簿 先生方の住所 (2頁)

「記念帖」に記されている各頁の項目内容を取り上げた。括弧内は提示物を記した。

「記念帖」は、表紙も含めて丁寧に絵と文字で描かれた構成で、謄写版印刷した後に色を付けて作成したものであった。なかには写真が添付され、当時の様子が分かる頁もある。

表1の1「園児募集」の頁にある写真(文末図1)には、30名程の子どもたちが鶴町教会の前に並んで映っている。写真にあるように入園申込時には、多くの子どもが順に待って受付に来ていたと考えられる。戦時下にもかかわらず、幼稚園、しかも日本メソジスト鶴町教会の幼稚園に少なからぬ入園希望者があったことが分かる。実際、2「オトモダチ ヨセガキ」(お友だち 寄せ書き)では、当時の卒園児1人1人がカタカナ文字や漢字で名前を書いており<sup>20)</sup>、18「第十七回修了児名簿」より、当時53名の園児が修了したことが分かる。

続く「記念帖」のいずれの頁も、当時の子どもの様子やエピソードが鮮明に記述されており、これは南信子の実践内容として読み取ることが出来る。したがって、本稿では、南のキリスト教教育の実践に着目し考察する(「記念帖」より引用は原文のまま記載する)。

#### 4-2. 戦時下における南信子のキリスト教幼児教育の実践

##### ① 子どもの思いが尊重された自由教育

###### ・「オシゴト」(お仕事)

表1に示した5「ワタクシタチノオシゴト」(私たちのお仕事)の記述事項によれば、子どもたちが種々の素材を利用しつつ、生活経験を通して思い描く様々な事物を製作していたことが読み取れる。さらに、「オシゴト」(製作作業)中の写真と、1人1人が作品を持って記念に撮ったと思われる写真(文末図2)が添付されている。写真の子どもたちは、生き生きとした表情で映っている。添えられた記事では、子どもの思いや発想による当時の製作活動の様子が詳細に描かれ、1人1人の作品を以下のように紹介している。

マイニチ マイニチ オモシロクオシゴトラ

シマシタネ

ツクエヲナラベテミンナデ ミンナデナカヨク  
ク ドンナニ シツパイシテモ サイゴマデ  
ガンバリマシタ テイネイニ イツシヤウケ  
ンメイ カンガヘテ クフウシテ ホントニ  
オモシロイ オシゴトガ デキマシタネ  
ノボルサンノタイコ  
ヒナマツリノヒ ゴニンバヤシサンガ タ、  
イテアソビマシタネ  
ヤスヒコサンノトケイ  
ネジモフリコモアツテ ハリモ ウゴイテ  
スバラシカツタ  
ソウヘイサンノジトウジヤ  
ボールガミヲクミタテテ ナガイアヒダ カ  
カツテ ツクリマシタネ  
クニヲサンノフエ  
アナライクツアケルノカ ゴイツシヨニ シ  
ラベテ ミマシタネ  
マサヲサンノカベカザリ  
ユキノケシキカシラ  
キョチヤンノオイヘトオニハ  
カーキイロノオヤネニ ムラサキノオイヘ  
オマドガアツテ オニハニ オイケモ クサ  
モキモ アリマシタネ  
エイコチヤンノマルイガク  
ミンナデアライレカヘラレル ガクラ カン  
ガヘマシタネ  
フミコチヤンノカワイイテカゴ  
アカヅキンノゲキラシタトキ コノカゴニ  
ゴチソウイレテ オバアサンノウチヘ モツ  
テ ユキマシタネ  
ヤスヒササンノカミシバキ  
オベントウノアト カチカチトヒヤウシギガ  
ナツテ オモシロイカミシバキガ ハジマリ  
マシタ  
カヨコチヤンノカワイ、ガク  
キレイナエガハイツテキマシタ  
ジユンコサンノオニンギヨウノイヘ  
カナイハニンノニギヤカサ  
ミノルサンノスイゾククワン

タヒモ カニモ タコモキテ・・・ モット  
 モット イロイロノオサカナヲ ゴホンデシ  
 ラベテハ ツクリマシタネ  
 ボールガミ チヨガミ オリガミ ツヤガミ  
 セロフアン ヒゴダケ キビカラ ムギワラ  
 モール イロンナモノデ ミンナ クフウシ  
 テハ オモシロイモノヲ ツクツタオシゴト  
 ノジカン ダイスキデシタネ

「ゴニンバヤシ」(五人囃子),「トケイ」(時計),  
 「フエ」(笛),「カベカザリ」(壁飾り),「オイヘ」  
 (お家),「ガク」(額),「テカゴ」(手籠),「カミ  
 シバキ」(紙芝居),「オニンギヨウノイヘ」(お人  
 形の家),「スイゾククワン」(水族館)とあるよ  
 うに,子どもたち1人1人の作品は様々である。  
 それらは,保姆が子どもに何か1つのものを提示  
 し,作らせるような活動ではなく,子どもたちの  
 個々の要望が表現される自由な作業であった。ま  
 た,「ソウヘイサンノジトウジャ ボールガミラ  
 クミタテテ ナガイアヒダ カカツテ ツクリマ  
 シタネ」(そうへいさんの自動車 ボール紙を組  
 み立てて 長い間 かかって 作りましたね)等  
 と固有名詞を使用し,1人1人の製作する姿や活  
 動を發展させていく様子までも分かる詳細な綴り  
 方で残されている。さらに,「モット モット  
 イロイロノオサカナヲ ゴホンデシラベテハ ツ  
 クリマシタネ」(もっともっと 色々のお魚を  
 ご本で調べては 作りましたね)と,子どもの内  
 側から湧き出てくる意欲や態度が尊重され,子ど  
 もたちは,試行錯誤しながらも創り上げている。  
 この「オシゴト」の記録から,想像/創造的な南  
 の自由教育の展開が読み取れる。「ドンナニ シッ  
 パイシテモ サイゴマデ」(どんなに 失敗して  
 も 最後まで)とあるように,「オシゴト」とい  
 う自由作業は,子どもが納得するまで保姆によ  
 って見守られていた。子どもの要求や発想を肯定的  
 に受け取り,1人1人の思いが実現するよう子ど  
 もの主体的な経験を大事していた南のまなざし  
 が,ここには表われている。

#### ・「リズムノジカン」(リズムの時間)

また,6「リズムノジカン」では,以下の記述  
 と子どもを前に楽器を持って鳴らしている指揮者  
 の写真(文末図3)から,楽しい活動情景が読み  
 取れる。

ピアノニアハセテ オアルキヤ ケンケン  
 スキツプヲシタリ ウマ ゴウ クマ ウサ  
 ギニナツテ トンダリ ハネタリ ヒカウキ  
 ニナツタリ トケイニナツタリ オハナヤ  
 オヒサマヤ アメニナツタリ オンガクデ  
 オドツタリ ミンナウレシソウデシタネ  
 ガクタイデ ヘイタイゴツコモオモシロカツ  
 タシ アカツキンヤ モモタロウノゲキデハ  
 ピアノニアワセテ オホカミガ オドリダシ  
 タリ キジガトンダリ モモタロウサントオ  
 ニガ イクサヲシタリ ユクワイデシタネ  
 ヨウチエンデ ニュースノオジカンヲ ツク  
 ツタトキ ラジオノハウソウノヤウニ キレ  
 イナニユウスノマヘノ オンガクヲカンガヘ  
 テ ツクリマシタネ  
 ソウソウ スズト トライアングルデ カワ  
 イイ フシデシタネ

動物や乗り物,植物や身近なものになりきった  
 子どもたちが身体を動かす楽しい活動が展開して  
 いた。ピアノに合わせて,子どもたちの体が動き  
 出し,踊ったりしていた。また,写真「リズムノ  
 ジカン」(文末図3)に映る子どもたちは,太鼓,  
 ベル,トライアングル等,色々な楽器を笑顔で演  
 奏していた。さらに,男児が椅子の上に立ち指揮  
 をしている様子が生き生きと映っている。これら  
 の活動でも,子どもたちは喜んで取り組み,楽し  
 んでいた。

記述内容によれば,楽隊では「ヘイタイゴツコ  
 モオモシロカツタシ アカツキンヤ モモタロウ  
 ノゲキデハ ピアノニアワセテ オホカミガ オ  
 ドリダシタリ」(兵隊ごっこも面白かったし 赤  
 ずきんや 桃太郎の劇では ピアノに合わせて  
 狼が 踊り出したり)とあるように,子どもた

ちが兵隊、赤ずきんや桃太郎に興味を持ち、真似たり演じたりしたことが愉快だったと南は受け止めている。また、南は「ニュースノオジカンヲ ツクツタトキ ラジオノハウソウノヤウニ」(ニュースのお時間を 作った時 ラジオの放送のように)と、あたかも本当のラジオニュースのように創って遊ぶだけでなく、「キレイナニユウスノマヘノ オンガクラカンガヘテ ツクリマシタネ」(きれいなニュースの前の 音楽を考えて 作りましたね)と発展し楽しむことができるように促していた。

鶴町幼稚園では、今日で言うごっこ遊び、すなわち本物のように真似たり見立てたり、子どもが思い描く空想のなかでなりきったりする活動が展開されていた。戦時色が反映した兵隊ごっこ、童話や昔話への興味関心による劇、ラジオニュース放送。いずれも子ども自らが憧れたりやってみたいたり思ったりしながら心の内側を動かし、想像的な世界や場面を創り出していく活動であった。南信子は、子どもたちが戦争を肯定し、たとえ成りたいことが兵隊であっても、子どもの楽しみたい思いを否定せず受け入れていた。南は、想像/創造的な遊びを大事にしていたのである。

・「オウタヤオハナシノジカン ゴソウダンノジカンノコト」(お歌やお話の時間 ご相談の時間の事)

7「オウタヤオハナシノジカン ゴソウダンノジカンノコト」は、「センセイ オハナシシテ オハナシシテ ミンナ オハナシガダイスキデシタネ」(先生 お話して お話して みんな お話が大好きでしたね)と始まり、子ども自らが発見したことや自由な思いから生まれる言葉の表現を大事にしている様子が描かれている。

- ・センセイ オハナシシテ オハナシシテ ミンナ オハナシガダイスキデシタネ ドンナ オハナシガイ、ノ?オモシロイ オハナシ? コワイオハナシ?カナシイオハナシ? コワイオハナシノスキナヒトガ オホクツテ

- センセイハ ビツクリ シテシマヒマシタ。
- ・シナノヒカウキカ ニツボンノヒカウキカ ドウシテワカル?
- シルシデワカル デモヨルデワカラナイトキハ?
- サーチライトデ テラシテミル ソレカラ センセイ オトガチガフツテ イツタヒトガ アリマシタネ。「オト」「オト」 ソレカラ ミンナデ イロンナオトラ キ、マシタネ。 オメモヲトヂテ ザラザラザラツト オママヲオトスオト ハサミデ ボールガミラキル オト ゴホントゴホントアワセルオト テツトテツヲウツオト オメモヲトヂルト チツトモ ワカラナクツテ フシギフシギ コレカラモ オミミヲ ツヨクシマセウネ。
- ・カンガヘモノヲシテアソングトキ テデミルモノナアニ?
- タイテイノヒトガ カウサンシタノニ ドウシテモ アシタマデカウサンシナイツテ ガンバツタノハ ダレデシタカネ。
- ・ケンカシナイオヤクソクヤ キレイニオヘヤラスル オヤクソク タクサンタクサン オヤクソクヲシタノモ ゴソウダンノジカンデシタネ。

南の発問によって子どもらが話題をつなげて、思いや考えをやりとりする場面が生き生きと綴られている。子どもの内面で起こる「なぜ」、「不思議」という問いや感動を大事にしていた南のまなざしそのものが記録から読み取れる。

南は、「シナノヒカウキ」(シナの飛行機)と「ニツボンノヒカウキ」(日本の飛行機)を比較し、「シルシ」(印)や「オト」(音)による異なる発見をした子どもの表現を受け止め、それに応じて発問したり共感していた。同時に「ソレカラ ミンナデ イロンナオトラ キ、マシタネ」(それから みんなで 色々な音を 聞きましたね)と、その音に関連した実際の活動へと展開させたことがわかる。また、子どもたちの疑問や発見を言語の提示による理解で終わらせるのではなく、実際

の経験へとつなげていた。さらに、南は、「オメメヲトヂルト チツトモ ワカラナクツテ フシギフシギ」(お目を閉じると ちっとも わからなくて 不思議ふしぎ)と、子ども自らが不思議に感じることや、そこから考えることにつなげる対話の発展を促していた。

そればかりではない。「カンガエモノヲシテアソグトキ」(考え物をして遊んだ時)では、「ドウシテモ アシタマデカウサンシナイツテ ガンバツタノハ ダレデシタカネ」(どうしても 明日まで降参しないって 頑張ったのは 誰でしたかね)とあるように、子どもが自己の意思を貫く様子を受け止めていた。戦時下の一斉活動等が強調される中であっても、南は、子どもの個々の主張を大事にし、理解しようとしていた。

ただし、子どもたちが大好きな「オハナシノジカン ゴソウダンノジカン」の話題は、「シナノヒカウキ」「ニツボンノヒカウキ」とあるように、戦争に関する事柄であった。戦争を肯定的にとらえる子どもの発想を全く否定はできなかった。それもまた、子どもの内側から動く応答性、対話を重視していたからである。

## ② 受け入れざるを得ない子どもの姿

### ・「ラジオタイソウ」(ラジオ体操)

たしかに、当時の社会背景は、子どもたちの生活や活動に少なからぬ影響を与えていた。

3「ラジオタイソウ」(表1)では、皆一斉に手を挙げ万歳の姿勢をする写真(文末図4)と飛行機の絵、その下に次の歌とエピソードが記されている。そのまま引用する。

オカタヅケ オカタヅケ オヘヤノアソビガ  
ラハツタラ ツミキモ ゴホンモ オニンギ  
ヨウモ キレイニ キレイニ オカタヅケ  
オカタヅケノピアノガ ナルト ミンナ キ  
レイニ キレイニ オカタヅケヲシテ ラジ  
オタイソウ ノゴヨウイラシマシタ ゲンキ  
ノヨイラジオタイソウ トキドキ ギンノツ  
バサノ ヒカウキガ イサマシイ ウナリラ

タテテ タイソウシテキル アタマノウヘラ  
スギテユキマシタネ

両手を大きく上に広げて伸ばし、万歳の姿勢の子どもたちが、写真に映し出されている。コメントによれば、遊び終えて「オカタヅケ」(お片付け)をした後に、「ラジオタイソウ」をしていた。毎日「ラジオタイソウ」は、片付けの後に一斉に行なわれていた。「オカタヅケノピアノガナルト」(お片付けのピアノが鳴ると)と楽しい雰囲気はあるものの、一斉活動を行なっていたことは間違いあるまい。

### ・「ダイトウアセンガ ハジマツテカラ」(大東亜戦が始まってから)

10「ダイトウアセンガ ハジマツテカラ」(表1)のエピソードを見てみよう。世界地図を見て調べたり、機関銃や看護婦の帽子を作ったり、「ホンコン マニラ シンガポール “カンラク” ヒノマルノハタヲフツテ ガクタイニアハセ センソウニカッタ ウレシイココロ イッパイデ アルキマシタ」(香港 マニラ シンガポール「陥落」日の丸の旗を振って 楽隊に合わせ 戦争に勝った 嬉しい心 いっぱいで 歩きました)と言って日の丸の旗を振り楽隊のように歩いて遊んだ様子が記録されている。これらの戦争にまつわる遊びは、南にとっては受け入れざるを得ない子どもの遊びだったのだろうか。以下のように綴られている。

ダイトウアセンガ ハジマツテカラ マイニ  
チ マイニチ ミンナデ セカイチヅラ ミ  
マシタネ  
ミナミノハウノオクニニ ヒノマルノハタ  
ガ アガルタビニ ヘイタイサンノコトヲオ  
モツテ オイノリシマシタネ  
ヲトコノヒトタチハ オホキナツミキデ シ  
ンガポールノヨウサイヤ コウシヤホウ キ  
クワンジウヲツクツテ センソウゴツゴラ  
シテアソビマシタ

オンナノヒトタチガ カングフサンニナツ  
テ ハタラキマシタ カングフサンノボウシ  
モ オクスリイレルカバンモ オシゴトデツ  
クリマシタネ。

ホンコン マニラ シンガポール ランゲー  
ン “カンラク”

ヒノマルノハタラフツテ ガクタイニアハ  
セ センソウニカッタ ウレシイ ココロ  
イツパイデ アルキマシタ。

ここでは2頁にわたり、戦争ごっこのエピソードが記されている。写真は3枚添付されている。兵隊を真似た身振りの男子の写真(文末図6)、戸外で楽器をほぼ全員の子たちで鳴らしている写真、日の丸を大勢の園児が振っている写真(文末図7)である。これらは、戦争の背景がそのまま反映された子どもたちの活動展開であった。ここでも南信子は、戦時下の社会に率直に応じる子どもの姿を否定することより、生活経験から生まれてくる子どものありのままの思いや行為を受け止めていた。南は戦争という現実をありのまま再現する子どもの実態の中であって、子どもの素直な心の育ちに向き合っていたのではないか。だから、「センソウニカッタ ウレシイ ココロ イツパイデ アルキマシタ」と戦争に勝つ嬉しさを共感し、肯定的に捉えざるを得なかった。

ただし、このような中でも、南は「ヘイタイサンノコトヲオモツテ オイノリシマシタネ」(兵隊さんのことを思って お祈りしましたね)というように常に祈っていた。戦争が続き、生活や遊びの内容に影響がある状況であっても、キリスト教幼児教育を実践することができたのである。南の実践では、「ヘイタイサンノコトヲオモツテ オイノリシマシタネ」とあるように、人のために祈ることは継続されていたのである。

・「ボクが大キクナツタラ ワタシが大キクナツタラ」(僕が大きくなったら 私が大きくなったら)

さらに、17「ボクが大キクナツタラ ワタシガ

大キクナツタラ」(表1)では、当時の卒園児の子たちの描く理想(夢)が綴られている。「ボク オホキクナツタラ カイグンノイチバン エライヒトニナル」(僕 大きくなったら 海軍の一番 偉い人になる),「ボクハ リクグンガスキ」(僕は 陸軍が好き),「ボクハ ヘイタイサンニナル」(僕は 兵隊さんになる),「ワタシハカングフサンニナル」(私は看護婦さんになる),「ワタシハクスリヤサンニナル」(私は薬屋さんになる)とあるように、戦時社会の中で素直に戦争に関する事柄や職に憧れを抱く子どもの思いが表されている。しかし、それとは異なり、「ボクハ クワイシヤデハタラク」(僕は 会社で働く),「ボクハベンキョウヲスル」(僕は勉強をする),「ワタシガオホキクナツタラ ヨウチエンノセンセイニナル」(私が大きくなったら 幼稚園の先生になる),「ワタシハオモチヤサンニナル」(私おもちゃ屋さんになる),「ワタシハクワイシヤデハタラクヒトニナル」(私は会社で働く人になる)と、子どもたちは、幼稚園の先生やおもちゃ屋さんなど、独自の思いを描き、理想をも語っている。前述のように、南信子は、戦時下の社会背景に素直に思い描く子どもの姿も、そのなかでも自由に考えや願いを表現する子どもの様子も、そのいずれも受け止めていたのである。

### ③戦時下で続けたキリスト教行事と生活の中での祈り

戦時下の実情を受け入れざる得ない一方、鶴町幼稚園における行事では12「ハナノヒ」(花の日)、13「エンソク」(遠足)、14「(クリスマス)」、15「オヒナマツリ」(おひな祭り)、16「ソツギョウシキ」(卒業式)が行われ、キリスト教の行事及び日本の文化行事等も大事にされていた。しかし、「ハナノヒ」の写真(文末図7)では礼拝堂の講壇後ろに国旗が掲示され、「クリスマス」写真(文末図8)ではキリスト教を示す十字架等の装飾は伏せられて、星空が表現されている。写真をよく見ると、子ども等が星、天使、博士、羊飼いを見立て衣装を身に着けて映っている。

ただし、キリストの姿を見立てているものは一切みられない。南の実践は、国家の体制、特に基督教保育連盟の通達に応じながら、キリスト教行事を継続してゆくものであった。

記載内容では「クリスマス」という文言の表記はないものの、コメントでは「モロビト コゾリテ ムカヘマツレ ヒサシクマチニシ シユハキマセリ シユハキマセリ シユハシユハキマセリ」(もろびとこぞりて 迎えまつれ 久しく待ちにし 主は来ませり 主は来ませり 主は主は来ませり)と表記し、「主(シュ)」というキリスト教を示す言葉があえて記載されている。これは「もろびとこぞりて」の讃美歌を子どもが親しみわいゆる歌として扱い、残したものだろうか。あるいは、南信子が自分の信仰を貫いてせて歌詞としてでも残したかったものなのだろうか。

なぜなら、記念帖には、行事は「遠足」「花の日」「卒業式」、生活場面は「お弁当」「お祈り」などというように、その内容に即した名称が示されている。ただし、クリスマスの場面の頁だけは、タイトル名があらわされず、写真と讃美歌のみで提示されているのである。

いずれにしても、これらはまぎれもなく基督教保育連盟の通達に従い、国家主義体制を取り入れざるを得なかった社会背景を反映している。しかし、同時に、鶴町幼稚園の様子は相い容れないはずのキリスト教の行事を大事に扱い、戦時下の中でも貴重な事実があったといえる。

また、日々の生活や遊び場面に着目すると、4「オイノリ」(お祈り)(文末図9)では南信子がピアノを弾き、当時の当番であろうピアノの前に立つ2名の子どもや他の子ども全員と一緒に、拝むような姿勢(祈る様子)が映し出されている。歌の内容は以下の通りである。

アカルイアサニナツタトキ ワタクシタチハイ  
イノリマセウ シヅカニオテテラクミアワセ  
ケフモヨイコデアルヤウニ オマモリクダサイ カミサマト  
クライヨルニナツタトキ ワタクシタチハイ

ノリマセウ シヅカニフタツノメラトヂテ  
ブジニオクレタイチニチノ オレイヲモウシマス カミサマト

讃美歌では「オマモリクダサイ カミサマト」(お守りください 神様と)「オレイヲモウシマス カミサマト」(お礼を申します 神様と)とあり、また、11「オベントウ」(お弁当)(表1)では「オベントウ マチドホシカツタ オベントウ オイシカツタ オベントウ キモノモ ゴハンモ オウチモ ミンナ クダサル カミサマ アリガトウ トイツテ タベマシタ」(お弁当 待ち遠しかった お弁当 美味しかった お弁当 着物も ご飯も お家も みんな くださる 神様 ありがとう と言って食べました)と、いずれも神への願いや感謝を祈る情景が残されている。当時の鶴町幼稚園の生活では、南と子どもたちは、讃美歌を歌い祈ることを通じて神に向き合っていた。鶴町幼稚園では、神に祈ることが大事にされていたのである。

さらに、鶴町幼稚園での生活では、南は子どもたちの様々な遊びに寄り添っていた。園庭で遊ぶ様子も詳細に記録されており、写真(文末図10)には、南が子どもたちに寄り添う姿が映し出されている。8「ヒノテルトコロデ アソベアソベ オモシロクウタヒ アソベアソベ」ワクノボリ、スナバ プランコ スベリダイ ミンナノダイスキナ オアソビデシタネ」(日の照るところで 遊べ遊べ 面白く歌い 遊べ遊べ 枠登り 砂場 ぶらんこ 滑り台 みんなの大好きなお遊びでしたね)(表1)と綴り、戸外の写真2枚が添付された頁が続き、次頁では「ママゴト シマセウ ナカヨクシマセウ オイモニダイコンゴチソウデキタ ポチモ テフテフモ オキヤクサマ」(ママごとしまししょう 仲よくしまししょう お芋に大根 ご馳走できた ポチも 蝶々もお客様)のコメントの下に、「ママゴト」(文末図10)、「キグミノオトモダチ」(黄組のお友だち)のタイトルで写真が添付されている。

#### 4. まとめ

南信子は、1942（昭和17）年度の鶴町幼稚園における遊びや生活のなかで、子どもの内側から湧き出てくる1人1人の思いや考えを受け止め、子どもが自由に表現する想像／創造的な活動を展開していた。また、戦時下における鶴町幼稚園では、国家主義による影響や基督教保育連盟の通達に応じるながらも、キリスト教の行事等を大事にしていた。特に、日々の生活が制限されるなか、常に子どもの姿に寄り添い、共に祈っていた。これらのことから、南信子の幼児教育観、子ども観、及び戦時下におけるキリスト教幼児教育の実態を次の3点にまとめることができる。

第一に、南の実践は、子どもの内側から湧き出てくる思いや願いを受け止め、それをつなげる活動展開であった。「記念帖」には、当時の鶴町幼稚園における1人1人の子どもの生き生きとした表情や姿勢等の記述や写真が残されている。自由作業「オシゴト」では、子どもの思い通りにならなかったり、失敗したりすることがあっても、その姿を支え、創り上げていく過程を大事にされ、想像／創造的な自由教育が展開されていたのである。「リズムノジカン」では、子どもの真似たり見立てたりしたいという要望を尊重し、たとえやりたい活動が兵隊ごっこであっても、子どもらが喜んで取り組み、楽しむ場面を大切にしていた。「オウタヤオハナシノジカン ゴソウダンノジカンノコト」では、「センセイ オトガチガウツテ イッタヒトガ アリマシタネ。『オト』『オト』 ソレカラミンナデ イロンナオトラ キマシタネ。」（先生 音が違うって 言う人が ありましたね「音」「音」・・・）と、子どもが不思議と感ずる疑問や発見に共感し、さらに問いかけることによって対話が発展していった。それは、子ども自らが内側で感じたり考えたりすることを大事に育てる自由教育の実践であった。つまり、子どもらが心を動かし実際の経験へとつなげる対話は、南の自由な教育を支えていたのである。戦時下における鶴町幼稚園の生活や遊びでは、常

に子どもが主体的に表現できる環境や雰囲気があり、なかでも子どもの内面にある思いや願いを受け止める南信子ら保姆のまなざしによって、自由な教育が実践されていた。

第二に、南信子の幼児教育観を支えていたのは、子どものありのままの姿を尊重する子ども観であった。南は、「記念帖」に当時の社会背景が反映した具体的な子どもの様子、なかでも遊びの内容や生活の実態を丁寧に記録している。「ダイトウアセンガ ハジマツテカラ」では、戦争ごっことして、現実社会をそのまま再現するような活動を行っていた。南にとって戦争ごっこは、子どもの思いや考えを否定せず、受け入れざるを得ない活動であった。そのなかで大事にしていたのは、子どもの素直な心であり、子ども1人1人が真実な存在であることであった。また、「ボクガ大キクナツタラ ワタシガ大キクナツタラ」では、率直に兵隊や会社員や玩具屋に憧れる子もいた。南は、子ども1人1人が理想や願いを自由に語ることを受け止めていた。つまり、子どもとは、個々にさまざまな思いや感情、考えや願いをもっている存在であると捉えていた。

第三に、戦時下におけるキリスト教幼児教育を伝える貴重な事実が「記念帖」に残っていた。鶴町幼稚園では、日々の祈りを大事にして、キリスト教の行事を行っていた。国民学校による影響、特に国家に応じた基督教保育連盟の通達に従順に応じながらも、「ハナノヒ」や「クリスマス」を行っていた。戦時中でも、南の実践は、子ども1人1人の内面に寄り添うキリスト教精神を貫いていた。それは、祈りや行事だけではなく、鶴町幼稚園での生活や遊びの場面でもあらわれていた。

以上のように、南信子が綴った鶴町幼稚園の記念帖には、戦時下における子どもの思いや願い、また、その子どもを見る目や考え等が具体的に記されていた。南信子の戦時中のキリスト教幼稚園での幼児教育の実践では、子どもの主体的に動き出す自由作業や経験に結びつく対話、さらにリズムやごっこ遊び・劇等を通じた、想像／創造的な楽しい経験が繰り広げられていた。それが南の自

由教育であった。

たとえ戦時体制の状況であっても、子ども1人1人の内側が動き出す素直な心を尊重し、なかでも神への祈りを子どもと共に重視していたことは、南信子の揺るがない確かなまなざしとなり、その後の幼児教育の発展につながる教育観及び子ども観となっていたのではなかろうか。

本稿は、筆者が日本乳幼児教育学会第26回大会(2016年11月26日)研究発表の内容に、加筆修正したものである。

図1～図10:『第拾七回修了記念アルバム 鶴町幼稚園』(北陸学院ウイン館「南文庫」所収)の各頁を撮影し、一部抜粋したものを提示する。

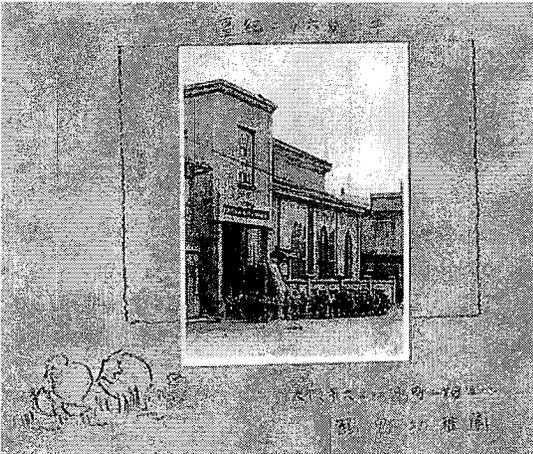


図1 園児募集 (頁全体撮影)



図3 リズムノジカン (写真のみ抜粋)

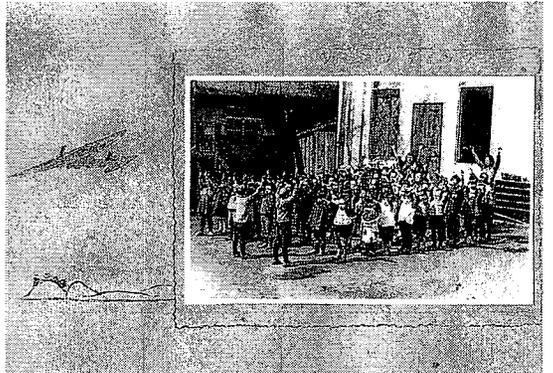


図4 ラジオタイソウ (頁内の写真及び絵を抜粋)



図2 ワタクシタチノオシゴト (写真のみ抜粋)

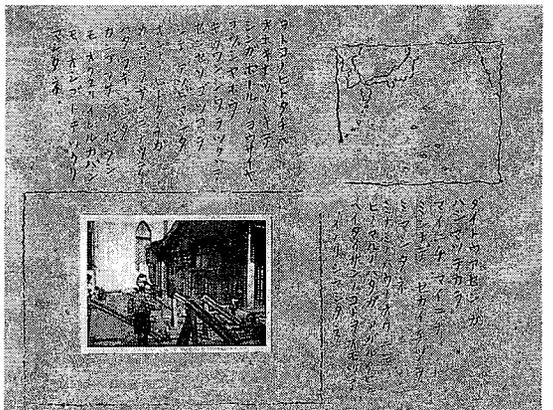


図5 ダイトウアセンガハジマツテカラ① (頁全体撮影)



図6 ダイトウアセンガハジマツテカラ② (頁全体撮影)



図9 オイノリ (頁全体撮影)

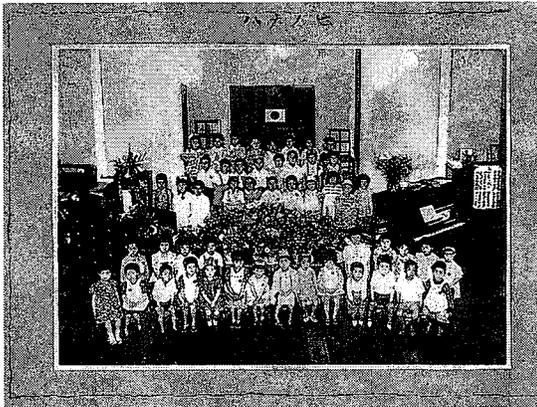


図7 ハナノヒ (写真のみ抜粋)



図10 ママゴト (写真のみ抜粋)

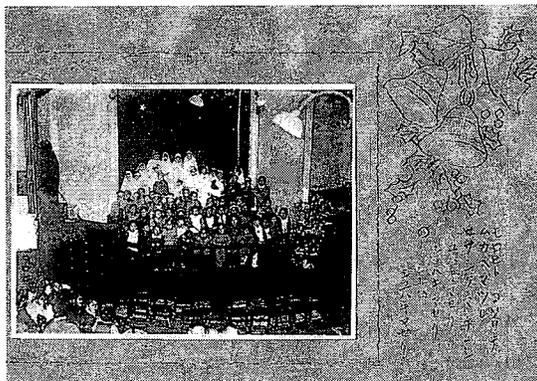


図8 クリスマス (頁全体撮影)

【註】

- 1) 南信子は、1950年から1990年まで、北陸学院保育短期大学（後に北陸学院短期大学保育科）で、幼児教育学を中心に教育実践及び研究活動に携り、石川県の保育者養成の指導的役割を担った。その他、1969年から1995年まで、金沢大学教育学部「育児学」非常勤講師として教鞭をとった経歴がある。
- 2) 拙稿「南信子の保育思想の形成および保育実践・理論の展開－戦前・戦後の歩みから－」平成25年度金沢大学大学院教育学研究科教育実践高度化専

- 攻修士学位論文, 2014年3月.
- 3) 『Thy Will Be Done 聖話の128年』(聖和史刊行委員会編, 関西学院大学出版会, 2015年3月)では, 1930年代, 鶴町教会の幼稚園(鶴町幼稚園)が, 米国南メソジスト監督教会宣教部(ミッション)経営の幼稚園で「ランバス関係幼稚園」とも呼ばれていたことが分かる(217頁)。1933年6月より大阪毎日新聞社社会事業団幼児部として, 「経費は新聞社が持つが, 教育保育全般はランバスに委任し宗教についても自由」(221頁)との約束で運営されていた。1937年4月から経営は在日米国南メソジスト宣教師社団法人社会事業部に移管され, 「鶴橋学園」と改称され, 教育保育は従来通りランバス女学院が行うこととなった(231頁)。1945年6月, 大阪空襲のため全焼する(256頁)。
  - 4) 北陸学院ウイン館「南文庫」所蔵
  - 5) 聖和保育史刊行委員会編『聖和保育史』聖和大学, 1985年。
  - 6) 日本保育学会『日本幼児保育史』フレーベル館, 1974年。
  - 7) キリスト教保育百年史編纂委員会『日本キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟, 1986年。
  - 8) 文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに, 1979年。
  - 9) 中村早苗「戦時下におけるキリスト教保育の変容—東洋英和幼稚園の保育日誌を中心に—」『キリスト教教育論集第24号』日本キリスト教教育学会, 2016年3月。
  - 10) 拙稿「戦時下の聖和幼稚園におけるキリスト教幼児教育の実態」『キリスト教史学』第71稿, キリスト教史学会, 2017年7月, 213-230頁。
  - 11) 本項では戦時下における幼児教育界の動向については, 文部省『幼稚園教育百年史』(「第三章幼稚園教育制度の整備と戦時下の動向」)ひかりのくに, 1979年, 251頁~262頁より引用・参照している。
  - 12) 昭和13年の月刊雑誌『幼児の教育』「時局の保育, 時局の影響を各地幼稚園に聞く」の調査によれば, 幼稚園に対する戦時社会の影響として, 次のことが挙げられる。『幼児の教育』(昭和13年)特集では, 以下の二つの問い, 「現下の時局, 貴園において幼児教育上注意し実行して居られることについて」・「現在の時局がいかにかに子供等に映じて居るか, それについての感想等」について, 10数園の幼稚園が回答を寄せた内容をまとめた。(文部省『幼稚園教育百年史』「第三章幼稚園教育制度の整備と戦時下の動向」ひかりのくに, 1979年, 254頁.)
  - 13) 前掲『幼稚園教育百年史』(256頁~257頁)は, 戦時下の幼稚園に対する影響を岡山県女子師範学校附属幼稚園における昭和16年の保育の目的や方針を例に挙げている。目的や方針が戦時色となっても, 保育の方法は子どもの生活を重視していたことが記載されている。
  - 14) 戦時下の幼稚園教育における自由については, 津守真・久保いと・本田和子『幼稚園の歴史』恒星社厚生閣, 1959年, 248頁~255頁を参照。
  - 15) 基督教保育連盟は, J.K.U (1906(明治39)年, 外国人宣教師における日本の幼児教育の連携と資質向上を目指した超教派組織 Japan Kindergarten Unionのことを指す。)を母体として1931(昭和6)年7月に軽井沢にて, 岩村安子を初代会長として設立された。岩村安子の夫は, 岩村清四郎牧師(日本日曜学校教会理事, 日曜学校教師養成に尽力した。1927(昭和2)年, めぐみ幼稚園:現在の大森めぐみ教会を創立し, 教育的伝道による教会形成を図った。)である。
  - 16) 本項では, 基督教保育連盟の通達については, 基督教保育連盟編『日本キリスト教保育八十年史』(「第4章結び 昭和期における学校としての幼稚園形成の課題」)1966年, 83頁~84頁及びキリスト教保育百年史編纂委員会『日本キリスト教保育百年史』(「第5章戦時下の保育」)307頁~308頁より引用・要約する。
  - 17) 「何とかファシズムの嵐を防ぎ切って行こうという姿勢が見えており, 体制には盲従していなかった。」と連盟年史では述べられている(前掲『日本キリスト教保育百年史』308頁)。
  - 18) 前掲「戦時下の聖和幼稚園におけるキリスト教幼児教育の実態」(220-221頁)では, 戦時下の基督教保育連盟の通達について, 「文部省出身矢野における戦時中だけのキリスト教保育連盟理事長の影響によるもので」と指摘されている。
  - 19) 1941(昭和16)年の記録によれば, 「戦時体制はますますきびしく, 諸事統制の時局に当たって, キリスト教に対する風あたりも強く, ところによっては園の中に神棚・御真影を備えることを強制され, 礼拝も公然とできないという状態など, 次々と情報を得, 連盟本部はいかにして地方の園を守り, 戦時下のキリスト教保育の具体的な問題

について指導するかについて協議し、文書でさし  
さわることは、できるだけ機会を利用して伝達  
するなど苦心を重ねた。」と当時の役員会の状況  
が分かる（前掲『日本キリスト教保育八十年史』  
170頁）。これらの事情から、「昭和17年3月7日付」  
の通達に至った。

- 20) 記念帖より、園児の直筆であることが分かる。